H·v·クライスト

——その青春の人間像——

吾妻雄次郎

1

1811年11月21日夕方4時頃，ワーン湖畔においてピストル心中をとげたH・v・クライストの人生は，その死がなによりもよく物語っているように，なにかしら閉ざされた追い詰められた状態からの脱出の試み，孤独な感情への沈潜等，極めて矛盾に満ち溢れた相容れない二つの要素の対立の上に，辛くも支えられた短かい数年であったということができる。それだけに詩人の運命がクライストの場合に見られるほど，その芸術作品と緊密な結びつきを示している例は稀であるように思われる。彼の創造活動に見られる強さと弱さ，壮烈と絶望，健康と病弱，恍惚と冷静，現実性と幻想性等々の混合は，なによりも彼自身の個人的な特異性や，彼の生活そのものを規定し形成している外的な諸条件から把握されることが大切である。例えばG・ルカーチは，此の混合の二つの極を別な角度から指摘して次のように述べている。

『クライストの根本特徴をまず確認するにさいして，深刻な矛盾をわれわれはすでに知っている。それは旧プロイセンの中尉であると同時に，偏狭な情熱と，破り難い不治の孤独の現代悲劇の先駆者となった人間であり，ヒステリーの現代悲喜劇の先駆者，古代のデオニソス的野蕃化と，古代から汲みとられたヒューマニズム否定の初の創始者なのである。

このような矛盾は彼の人間性と運命とをもっと近くから観察する場合深められる。』(1)

このようなルカーチの指摘は，クライストの持っている保守的な貴族性(ユウンカートウム)や，彼がつまるところ旧プロイセンの将校であるという事実と，彼のリアリスティックな1，2の作品を除いた大部分の作品の基調をなしている頽廃的な世界感情と，どのような結びつきを持っているかという大きな問題を提起する。まず彼が育まれた時代の2，3の特徴を考えて見ると，社会的精神的な二つの根本

方向が考えられる。それは封建反動を基礎とした浪漫主義的な非合理主義とフランス革命の結果として生じた市民的・革命的啓蒙主義思想であって，これらが，明確な世界観上の着想を欠きながら階級から離れがちに生活していたクライストに多かれ少なかれ強い影響をもっておったことは否めない。

従ってまずクライストがどのような家庭環境のもとに育まれたかを問題にすれば，彼は衛戍病院の出生表の示すところによると 1777 年 10 月 18 日フランクフルト・アン・デア・オーデルのプロイセン将校ヨアヒム・フリードリヒ・フォン・クライスト（Joachim Friedrich von Kleist）の息子として生れたとされている。彼はポムメル州の古い貴族の後裔であり，クライスト家は 18 人もの将軍を産んだ軍人家庭という特異な伝統に支えられ，天稟に恵まれた若き詩人は，こうした伝統を背景としながら，当時の貴族社会がすべてそうであったように，神学者である家庭教師のマルティニー（Christian Ernst Martini）によってある従兄弟と一緒に最初の講義を受けたのであるが，少年はこの家庭教師に特別の信頼をよせており，後になってもなおいろいろと人生についての問合わせをしたり，助言を乞うたりもしている。彼が『火のような精神』のもち主であり，しばしば，しかも容易に激しやすい少年であったということは，後年の彼の運命との繋がりにおいて興味深いことであるが，彼と共にマルティニーから講義を受けた従兄弟とは反対に，天賦に恵まれ，旺盛な知識欲を持ち，腹蔵のない快活な人間であったともされている。1788 年父が亡くなると，11才のクライストは教育のためにベルリンの養育者カーテルの家に赴くことになる。此のフランス人の亡命者は，文学について多方面にわたって関心をよせている男であり，特に彼の飜訳活動は秀れていて，それだけにクライストの最初の芸術的な刺戟は何と言っても此のフランス人におうところが大きかったのである。しかしながら彼の家庭の伝統からいって，士官になることを強いられたことは，いとも当然のなりゆきであった。彼は 1792 年 7 月 1 日付けで一種の幼年生徒として，ポツダムの封建的な近衛連隊に入ることとなるのであるが，この時代は反動勢力が革命的フランスに対して行った武力干渉の時代でもあり，また彼個人としては，深い愛情を傾けていた母親を失った，悲しみの時代とも重なっている。こうして彼もまた連隊と共に市民的フランスに対する進軍に加わることになり，たとえばマインツの包囲作戦等をも経験することになるが，こうした体験から生まれたものは，軍人の家庭にかならずしもそぐわない平和への渇望であって，厳しい荒廃した軍隊教練からの逃避が試られているのは興味深い現象である。

『われわれがこの地において，いとも悲道徳的に殺戮している時を，博愛主義的な行為でつぐなわんがために，天が唯われわれに平和を与え給わんことを！』(2)

1795年彼の最愛の異母姉ウルリーケ(Urlike Philippine v. Kleist)に宛てて書かれた一種の博愛主義的心情にあふれたこの書翰は，若き詩人が当時の軍隊に対して，また軍隊の持つ機能に対して，どのような考えをもっていたか，その一端を知る上に重要である。しかしこれはあくまでも『博愛』という，反人間的なものへの嫌悪といった類の心情であり，何ら意志的あるいは論理的なものでなかったことは言うまでもない。例えばクライストは，弟レオポルト(Leopold von Kleist)が非常に早く将校に昇進することを心の底から喜んでいるが，それはひとえに『彼（レオポルト—注・筆者）がこれまで生きてきた階級が，極めて多くの不快なこと，恐らく彼の若い年齢が反撥するであろう極めて多くの不都合なことを帯びている』(3)からに他ならないのである。

しかしいずれにしても，軍人として自己に対する彼の疑問，内的葛藤は，バーゼルの平和条約の締結によって，1795年6月彼が再びポツダムに帰って来るに及んでますます激しくなってくる。つまり彼は兵営での無味単調な勤務に対して，どうしても精魂を傾けて同調することが不可能になっている。このような傾向が軍の内部に多かれ少なかれ見受けられたであろうということは，将校仲間達が当時，酒宴，博賭，情事，馬，犬といった類の物にうつつをぬかしておったということからも察しられるのであるが，クライストは，こうした遊びにも打ち込むことができず，結局音楽に慰めを求めていることは興味深い。秀れたフルートの吹き手でもある彼が，志向を同じうする同僚たちと四重奏曲を構成したりするのもこの時代であり，またほんの一時的なものであれ，詩作にも意を傾けるようになってくる。1797年にいたって，クライストは中尉に昇進するが，内面的葛藤はますます強くなるばかりであり，軍人としての職業への嫌悪は日と共に大きくなってくる。彼は幼年時代の家庭教師クリスティアン・エルンスト・マルティニーに対して次のような手紙を送っている。

『私の全存在と全く異質なものをもっていましたから，私が決して心から好きになれなかった軍人階級は，私にとって非常に厭うべきものでありました。だからその目的に対して協力することは，私には次第に重荷になってきたのです。すべての精通者たちの驚歎の的であった軍隊規律の最も大きな驚異も，私の心からなる軽蔑の対象となってきたのです。すなわち私は士官たちをかくも多くの練兵係と見なし，兵士たちをかくも多くの奴隷と考えました。

そして若し全連隊がその術策を行うたびごとに，それは私にとって，専制政治の生きた記念碑のように思われました。おまけに私は，私の地位が私の性格につくった厭わしい印象を生き生きと感じ始めるようになったのです。私は自分が好んで大目に見たりすると，わざと罰せられることがありました。あるいはまた，私が罰すべきであった場合でも大目に見てやりました。そしてどちらの場合も，私は自分自身を罰すべきであると考えたのです。こうした瞬間にも，私が全く対立する二つの原理によって絶えず責め苛まれ，人間として行動すべきか，それとも士官として行動すべきか，いつも決しかねていた職業を去ろうという願いが，私の内部に発生せずにいなかったことは当然のことです。なぜかと申しますと，二つの義務を統一するということは，軍隊の今日の状態においては不可能であると私は考えたからなのです。けれども私は，私の道徳的形成を私の最も崇高な義務の一つと考えました。というのは今私が明らかにしましたように，それはまさに私の幸福の基礎をなしているからであって，かくて兵隊という職業（シュタント）を去ろうという義務感は，その職業に対する私の自然の嫌悪と結びついているのです。』(4)

ここに長なが引用したマルティニー宛てのクライストの書翰は，旧プロイセン将校の名門，あるいはまたユンカー出身云々と，その出生の面からのみ取り上げられがちなクライストの人間としての側面，ひいては彼のリアリスティツな作品の基調をなしている『作家の誠実さ(5)』の一端を探る緒口として貴重なものと思われる。たしかに彼がこの書翰において示した己れ自身に対する誠実さは，因習に対して非妥協的であり，また常に自己の内的な命令を，力強く真理を求めつつ，人間的完成に努めながら遂行してゆくひたむきな性格の現われという点で極めて特異なニュアンスをもっている。いわゆる『リアリズムの勝利』としてしばしば指摘される『ミヒアエル・コールハス』„Michael Kohlhaas“(Anfang der ersten Fassung im „Phöbus“ 1808; Erstausgabe 1810) や『壊れ甕』„Der zerbrochene Krug“ (1811) 等については作品論を踏まえて詳しくふれられなければならないが，やはりこの書翰等に端的に現われたクライストの人間性追求のひたむきな姿勢に，これら作品の方法の根が存しているように思われる。

2

さて 1799 年4月4日，いよいよ請願が叶えられて，クライストは軍から離れることとなるが，同時に彼は『研究』を終了したのち，彼の皇帝と祖国に，

市民という地位に於いて奉仕することを義務づけられることとなる。かくして彼は，家族の反対を押し切って，故郷の大学へ入学する運びとなるのであるが，此の祖先伝来の軍人の家柄からの彼の脱出は，彼の頑固さや強固な意志を証拠だてている謂わば丁年者の宣言と見ることもできる。クライストは全力を挙げて，『いつまでも無知なユンカーである』ことに逆らっている。彼は最も親愛の情を寄せていた異母姉ウルリーケに宛てて次のような書翰を送っている。

『専制君主の気まぐれにたいして此のように運命を奴隷的に捧げるということは，今や思索する自由な人間にとってふさわしくないことは勿論のことです。自由を思索する人間は，偶然が押しやる所にいつまでも停まっていはしないのです。（中略）彼は，運命に打ち克つことができる。いや正しい考えを持てば，運命を導くことすら可能であると思っているのです。彼は，どのような幸福が自分にとって至上のものであるかを理性に従って決めているのです。』(6)

此の手紙では，ただ専的制な拘束から脱出しようという姿勢がより一そう具体的であり，明確になっている。つまり逃避という姿勢から，『自由な思索する人間』としての自負，運命を打開し，それどころかこれを導いてゆこうという，謂わば新しい世界への挑戦の姿勢に変りつつあることが目立って来ている。しかしまた当時の他の書翰は，彼がいかに真面目に，その反面いかに衒学的に同時にまたいかに貪欲に，大いなる知識を我がものにしようとしていたかということをも示している。つまり彼はパンのための学問をひどく嫌っている。それは彼の研究の分野が数学であり，また哲学，物理学というのを見ても肯けるのであるが，これはまた知識の習得が，真理の認識と道徳的完成へ自分を導いていくであろうという。啓蒙主義的，楽天的信念に支配されていたことをも同時に物語っている。彼は未来の職業を，学問の教師，すなわち大学の教授の職に選ぼうと考え始めている。この頃から次第に，奇妙な放心状態，静かな沈思，そして馬鹿真面目な状態にとってかわって，明朗で有頂天な心境が彼を占めるようになっている。プロイセンの陸軍少将の娘ウィルヘルミーネ・フォン・ツェンゲ（Wilhelmine von Zenge）と近づくのも此の頃であり，彼は1800年に彼女と婚約を結んでいる。此の年は，ウィルヘルミーネに与えた手紙が数のうえからも分量の点からも圧倒的に多く，約20通の手紙が送られているが，その内容は，豊かな，あるいは熱烈な愛情につつまれたというよりは，むしろ彼自身の人生プランというか，思想というか，に完全に一致を求める傾向が特徴的で，未来の妻にいろいろと知識を与えんがために，ときには課題を課し，ま

た問いを発してそれに答えを求めるといったものまで含まれている。

『私たちは一度理性が語るところのものに耳を傾けたいと思う。私たちは此の足どり全体を，本当に理性的に試してみたいと思うのです。（中略）愛と教養は，二つとも私の未来の幸福の欠くべからざる条件なのです。（中略）私たちは，たがいに愛し合い，教養を高め合いたく思う。それには多額の金が要るわけではないのです——けれども何かは，何かは要るのです。で，私たちが持っているもので，充分に足りるだろうか？　いや，これは正に大問題なのです。(7)』

『教養は私にとって唯一の目的，努力の目的であり，真理は所有に値する唯一の富なのです。愛するウィルヘルミーネよ，私は君が此の二つの思想，真理と教養（原文ゴチ — 注筆者）を，私のように神聖な気持で考えることができるかどうか，私は知らないけれどもこうしたことは若し君が，私の魂のこのような歴史の経過を理解しようと思うならば必要であることはもちろんです。これらのことは私にとって非常に神聖でしたから，真理を貯え，教養を身につけるというこれら二つの目的に高価な犠牲を払ってきたのです。（中略）私たちが真理と呼んでいるところのものが，ほんとうに真理なのか，それとも私たちに唯そう見えるだけなのか，私たちは決めることができない。（中略）私の唯一の目的，私の最高の目的は消滅してしまった。そして私は今やもういかなる目的をも持っていない。

すなわち現世においてはいかなる真理も見い出されないという此の確信が私の心に浮んで以来，私は二度と書物に手を触れたことがない。私は無為に私の部屋の中を歩きまわり，開いた窓辺に腰をおろし，また私は戸外へ走って行く。内奥の不安が，結局私を酒場や珈琲店へ駆りたてる。私は気をまぎらすために，芝居やコンサートへ出かけていく。(8)』

これらの書翰によって明らかなように，『教養』と『真理』に人生の一切の価値を見い出し，また見い出そうと努めていた謂わば理想主義的人間は，そのひた向きな誠実さ，非妥協性によって，非人間的な軍の重圧，因習に根ざした家庭の切々たる要望を振り切ることもできたのであるが，その反面理想主義的傾向のもつ当然の帰結として，現実把握の誤算から，早くも空虚な『真理』への疑問によって虚無的な傾向へ走らざるを得なくなっている。これは階級から遊離した人間の辿る当然の道程であったのかも知れないが，1800年の末期に体験しなければならなかった官職に不適な自己への自覚もまた，煎じつめれば同じ傾向の表裏であったと見ることができるのである。

3

時期は前後するが，彼は 1800 の夏にベルリンへ赴き，ウィルヘルミーネとの結婚を経済的に可能にせんがために，身内の者たちの願いを受け入れてプロイセンの文官の職につこうとする。けれども最後的にこれを決定する前に，ライプツィヒ，ドレスデンを経てヴュルツブルクへの旅を，彼の友人ブロッケスと共に企てる。この旅の目的は今日にいたるまであまり明確にされておらず，ただ結婚を前にして幼年時代から彼に付着していた重荷から解放されようとしたのであろうという推測の域を出ないけれども，兎に角いろいろと好ましい成果をもたらし，クライストは比較的明朗な心境のうちにベルリンへ帰ってくる。こうして彼は，いよいよ生計を立てるために職業に身を委ねることとなるのであるが，どうしても官職に甘んじ切れない自分を感じないわけにはいかない。宮づかいはどうしても彼になじめないのである。つまり彼の市民的な教師によって授けられた，人間の真の価値についての理解が，どうしてもプロイセンの官吏生活と相容れないものと感じさせたに違いない。彼はウルリーケに宛てて『すべての人たちには黙っていなければならない多くのこと』を『貴女には全然誤解される恐れがないから，喜んで報せたい』意向を洩らしている。そして若しそのことを詳細に述べるとすれば，ながながと手紙にしたためなければならないだろうから，『唯貴女には私の現在の気持ちの2，3の主なる特徴を，全く簡単に報らせたいと思う』というのである。

『すなわち私は，以前にもまして職につくことに嫌悪を感じているのです。旅行する前は別でした——今は私の精神（ガイスト）と心（ヘルツ）の領域が全く無限に拡げられてしまったのです——（中略）私は職を得るには，そしてそれを行っていくには，自分が余りにも不適当に思えるのです。そして結局，職が導いてゆく幸福の全くの瑣事を，私は軽蔑しているのです。(9)』

いわゆる『就職』の問題に関して，彼が単に官職を回避しようとした事実を挙げれば事は極めて単純のように見える。この書翰からもうかがい知ることができるように，官職に適さない理由として，『精神と心の領域』が，友人ブロッケスと共に企てた旅ののち『無限に拡げられてしまった』ことが挙げられている。しかし私はここでブロッケスの存在を強調する理由を持っていない。つまり，彼クライストが官職に不適な自分を感じていくに到る，その原因をブロッケスという友人に見い出してゆく何らの根拠をもっていない。それらしいことは少なくとも書翰の中には見い出すことはできないのである。そして『旅行』

それ自体も，『精神と心の領域が全く無限に拡げられた』原因とはなっているかも知れないが，それがはたして『官職に不適』な自分を自覚する原因まで拡大して受け取っていいものか疑問のように思われる。つまり此の頃から一面では作家としての将来も念頭に上っていたようであるし，一方ではまたドイツに於ける『最新の哲学』をフランスに移植しようとするプランも，彼の内面を支配する有力な生活設計ともなっていたのである。しかもこうした事実は，『官職に不適な自分』を自覚していく彼の内面の変化と表裏をなすものであるということは，前掲ウルリーケに宛てた手紙（11 月 25 日付）に先きだつ 12 日ばかり前の，ウイルヘルミーネに宛てた文面からも推測することができる。この書翰は前にもその一部を挙げたように，『愛情と教養』を『未来の幸福の欠くべからざる条件』として挙げた，謂わば将来の花嫁への注文を理想主義的にかかげた例の書翰なのである。この書翰によると彼は自分に『稀に見る能力』を自負し，作家としての将来に期待を寄せ，収入の面でも楽観視していることが理解できる。

『ぼくはパリへ行き，此の好奇心をそそる国に最新の哲学を移植することができるだろう。（中略）若し君がぼくに数年，せいぜい6年裕余を与えてくれるなら，ぼくはお金を儲ける機会を，きっと見い出すだろう。[10]』

『最新の哲学』とは当時ドイツの思想界を風靡しつつあったカント Immanuel Kant（1724～1804）の教義を意味している。つまりクライストは，この時期にカント哲学の根本原理に精通するに及んで，早速この新しい思想をフランスに移植しようというプランを持っていたわけで，このことは一見たいして問題のないことのように思われるけれども，貴族出身という彼の出生の問題を考慮に入れるとき，将来の約束された官職の道に不適な自分を自覚していく，恐らくは精神的支柱として，更に経済的裏づけとしてカントの哲学が浮び上ってくるとすれば，クライストにとってこの最新の哲学者の存在も決して関係の稀薄な存在ではなかったと言わなければならない。しかし今此の詩人をカントとの関係から云々するゆとりを持たないが，少なくとも官職を放棄していく精神的，経済的裏づけ（たとえ単なる見込みにとどまったにしても）としてカントの存在が考えられることは否定すべくもないように思うのである。

けれども カント哲学へのより親密な接近は内的に重要な一つの問題を含んでいる。つまりカントの認識批判の研究そのものが，クライストのこれまでの相対的安定性に一つの危機を呼び起す結果となってくる。人間にとってあらゆる意味において包括的な認識はあり得ない。したがって確固唯一の真理は存在し

得ないだろうという理解は，知識を求める彼自身のひたむきの努力に終止符を打つ結果を招いている。

『しかし目的に対する正にこのような献身，思惟と行為，精神と人間性，詩作と生活との同一視の中に，クライストの人間の偉大さ，悲劇性が横たわっている。（中略）今やあらわれ始めたあらゆる活動の残る隈なき麻痺が，クライストのおかれている階級的孤独を説明している。彼は此の時代において，真理の認識を通して得ようと努めていた自由を斗いとらんがために，精神的においても，その生活様式においても，彼独自の階級から離れてしまったのであった。市民階級——当時プロイセンにおいては自覚的に存在していない——への内的関係なしに，クライストは知識と教養による，個人完成の可能性についての啓蒙主義的思想に身を委ねたのである。』(11)

この指摘にも見られるように，クライストの青春を形成してゆく思想形態の特徴は，彼が自己本来の階級から遊離しており，かといって彼が暗黙の中に辿りつつある思考過程にもっとも近い市民階級とも内的関係を持ち得なかったということに存している。当時彼の努力の唯一の目的でもあった『真理と教養』(ワールハイト ビルドウング)，この唯一の目的への疑問は孤独と焦燥以外の何ものももたらさない。『あらゆる人間が，眼の代りに緑のガラスを持っているとしたら，彼らがそれを通して見る対象も緑であると判断せずにはおれないだろう——そして人間は，彼らの眼が，彼らに事物を在るがままに示すかどうか，あるいは眼は，事物に属さないで眼に属するところの何物かを，その事物に付加しはしないかどうか，決して決めることはできないだろう。』(12) この手紙は，彼の『最高の目的』である『真理』が消滅してしまったことを告げるウイルヘルミーネ宛ての手紙と同一のものである。そしてあの，酒場や珈琲店を転々とする彼を，更に遠くへ駆りたてていく場所がパリーなのだ。だから実際のパリ行きは『新しい哲学の移植』を主要な目的とした，やや気負い立った5ケ月ばかり前の彼の心境とは，似ても似つかぬ内容をなしている。空ろで孤独な，虚無的な精神状態からの脱出，これが不安のうちに浮んできたフランスへの旅の目的に他ならない。

ところでクライストのパリ旅行は，『あらかじめ彼女に報らせることなしには決して祖国を去りはしないだろう』と彼が述べていた当のウルリーケと共に実現を見たのであるが，この年の7月10日にパリに到着して，その頃極度の上昇を見せつつあったこの国の資本主義的発展と直接自己を対決させることもなく，大都市での生活，その文化，ブルジョワジーの社会等に対して大して理解を深めた形跡もなく，イデオロギー的には反って後退の一途を辿っているよ

うに思われる。『私は学問を全く放棄してしまった。学識のある人間を，行動的な人間と比較して見ると，学識のある人間が，いかに私にとって嘔吐を催すか，私は君に書き尽すことができない。知識はそれが価値をもつにしても行動に対して準備をするかぎりにおいてのみそうなのである。』(13) この文章はパリにおける彼の傾向を示す一つの例にすぎない。しかし『私は仕事をすることができない。そうすることは不可能であり，どのような目的に立ち向うべきかを知らない』ことを悲痛に訴えた彼の旅行前の沈潜した心境とを比較するとき，そこには一方の極から他の反対の極へ走る彼独特の思考方法と行動の論理を発見する。

彼はやはりウイルヘルミーネに宛てた手紙の中で『一つの大きな欲求』が彼の中でうごめき始めたことを述べている。その欲求というのは余り明確ではないが，彼の説明によれば『それが満たされることなしには決して幸福にはなれない』性質のものであり，『これまでいつも私の悲しみに暗く根ざしていたもの』なのである。また此の『欲求』は『学問がもはや私を全く満足させなくなって以来，私の内部でうごめき』はじめたものなのである。そして彼は『大きな活動の範囲を探し求めることが，行動に喘ぐ心にとって先ず得策である』とも述べている。このことは前に述べた『行動的な人間』への憧憬と同じ基盤から生じているもののようであり，この後で行われるスイスへの旅行，そしてそこに『地所』を求め，『百姓屋敷』を求め，共に暮そうという許嫁への要求と直接結びつくものと判断して先ず差しつかえあるまい。書翰を見てくると，彼の行動的ということは，厳密に言って行動主義的であり，極めて衝動的であり，それだけに空想性はまぬがれ切れず，自己中心主義的傾向が特に目立っている。それは自己の心の揺れ動くままに，ただ心の安定のみを外部に求める行動の原理が基調をなしているように思われる。だからスイスへの旅行，いや旅行ばかりではなく適当な農地を求めて定住することを許嫁に求め，一応『ああ，私は沢山の障碍に追い返えされそうだ。しかしそれらを切り抜けることが出来たらなあ！　ウイルヘルミーネよ！　このような犠牲を君に求めるということは不遜であるように思う。』と言い，また『私はこのような犠牲を要求する権利をもっていないし，また君がこのようなことを拒絶したとしても，私はそのために君の愛を疑ったりはしない。』と述べてはいるけれども結局自分の体が農村夫人(ベウアースフラオ)の義務を果すには余りにも弱すぎること等を理由にウイルヘルミーネが拒否の態度を表明するに及んで，これまでの許嫁の関係を解消し，1802年5月20日付の手紙を最後に彼女との交渉は吐絶えてしまうのである。『私は，君がスイ

スへ私について来ようとしなかったことを，今では幸福に思い始めている。』そして此の最後の手紙は『愛する人よ，私にはもう書かないで欲しい。私はやがて死ぬ以外に望みを持っていない。』で終っている。

4

さてクライストという大きな存在を前にしては，漸くその基礎工事が何とか恰好がついたところで此の小論にも一応終止符を打たなければならない時がきたようである。彼の伝記にそくして見れば，漸くこの時点・状況に於て処女作『シュロッフェンシュタイン家の人びと』„Die Familie Schroffenstein"(1803)が生れてくる。だからクライストについての本論はまさにこれからでなければならないのは当然である。しかしそれを重々承知の上で彼の謂わば創造活動以前の時期に立ち停まらなければならなかったのは，彼の作品中とくにリアリティに富んだ『ミヒヤエル・コールハース』や『壊れ甕』等の作品が，何故にそうであり得たか，G・ルカーチの言う『作家の誠実さ』の内容を如何に理解すべきかという問題を，此の詩人の青春時代の『人』としての思想と行動から探りたかったからでもある。そして更に『シュロッフェンシュタイン家の人びと』をはじめとするその他の戯曲や短篇は，例の『リアル』な作品に較べて創造上のモチーフや素材はそれぞれ異にするけれども，これら二つの違った系列の作品に何かしら一貫した方法上の共通性があるのではないかということを，詩人の青春時代から探り出せそうに思ったからである。この問題は直接作品に即して云々しなければ明確には指摘できないけれども，漸く創造活動を開始するに到る彼の青春時代の書翰をとおして不充分ながら描き出した彼の性格上の本質からだけでも，ますます尖鋭化してゆかずにはおれない思想上の矛盾，破綻の思想を感じ取ることができる。それは一口に言えば，結局彼は旧プロイセン出身の中尉に停った，という身分上，思想上の一事実に帰し得るかも知れない。

偏狭固陋な情熱，癒し難い孤独な感情が，彼の生涯を通じて貫かれている根本的な特徴であり，このような傾向は，彼が先ず青春時代に体験した軍隊生活からの越脱や官吏生活への反撥が強ければ強いほどますます助長されずにはいなかったことも確かであり，16世紀の社会問題に取材し，主人公コールハースに加えられたお上からの悪事を通して，当時の貴族階級の腐敗，専横，不正等々を誠に意外なほどリアルに描き得た作品『ミヒヤエル・コールハース』にしても，作家としての『誠実さ』が，主人公の実に異常なほど情熱的な正義感に結びつき，この正義感に根ざす異常な執念に托されて結局は主人公を破滅へと

追い込んでいく。作品のこのような基調は，彼の殆どすべての作品に多かれ少なかれ見られるが，猜疑と誤解がプロットの基本的なプロセスを決定している『シュロッフェンシュタイン家の人びと』にしても，彼の無条件の誠実さが，極めて鋭敏な観察の才能と心理的詩的創造力と結びついて，己れ自身からあらゆる偉大な精神的着想や認識力を排除してしまい，その反面，認識源としての感情のみを強化するところの彼特有の創造上の傾向へ陥む結果を招いている。言い換えるとこのような矛盾性は彼の社会的位置と，人間的特性の相対的反映と見做すことができるのであり，しかもこれまで主として書翰を辿りながら考察してきた彼の創造活動以前においてもその緒口がいくつか発見できるのである。

（注）

（1） Georg Lukács: „Die Tragödie Heinrich von Kleist“ 1936. „Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts 収録。

（2） Brief an Ulrike v. Kleist. Eschborn, d. 25 Febr. 1795.

（3） 註（2）に同じ。

（4） Brief an Christian Ernst Martini. Potsdam. den 18 〔u. 19〕 März 1799.

（5） 前掲“Die Tragödie Heinrich v. Kleist“ において，Lukács は，„Michael Kohlhaas“ や „Der zerbrochene Krug“ を取上げ，Engels がバルザック評価の際に用いて有名な所謂『リアリズムの勝利』という言葉を以って，そのリアリテイを高く評価している。『この≪リアリズムの勝利≫は決して奇跡なのではなく，その主観的・客観的前提をもっている。主観的前提は作家の才能と誠実さ，即ち現実をその全き複雑さにおいて把握し表現しようとする作家の能力であり，彼が本当に見たところの世界を彼が本当に見たままに描こうという勇気なのである。（中略）ただ二，三の言葉を以ってなお彼の容赦のない主観的誠実さが強調されなければならない。』

（6） Brief an Ulrike v. Kleist. Frankfurt a. d. Oder, Mai 1799.

（7） Brief an Wilhelmine v. Zenge, Berlin, d. 13 Novmbr, 1800.

（8） Brief an Wilhelmine v. Zenge. Berlin, d. 22 März, 1801.

（9） Brief an Ulrike v. Kleist. Berlin, d. 25 Novmbr, 1800.

(10) 註（7）に同じ。

(11) „Zwischen Klassik und Romantik“ hrsg. von Kollektiv für Literaturgeschichte im Volkseigenen Verlag Volk u. Wissen. Leipzig 1956.

(12) 註（8）に同じ。

(13) Brief an Wilhelmine von Zenge. Paris, d. 10 Octobr, 1801.